

遠隔配信での英語授業の取組

－Chalk & Talk から Electronic Board へ－

遠隔授業配信センター 教諭 濱田 静代

1 はじめに

ICT を活用した遠隔教育は、多様性のある学習環境や専門性の高い授業の実現など、質の高い学習の実現に資することが期待される。一方で、ICT を活用していく教員の力量が求められることも確かである。使用機材に関する知識のみならず、担当教科（科目）における遠隔授業での特質を考慮することなどが不可欠である。私個人としては、「Chalk&Talk（黒板と口頭での授業）」で長年授業を行ってきたが、本年度は「生徒の学びを向上させるための遠隔教育システムの活用」について、1年間取り組み組んだ。

2 実践の内容・方法

(1) 機器の適切な使用方法の習得及び電子黒板などの ICT 機器を活用した教材の開発

ア パワーポイント及び自主作成プリント、スキャナー、書画カメラを活用した教材の作成・提示
パワーポイントやワードであらかじめ準備・作成しておいた教材を電子黒板に映すことで時間の短縮になり、生徒が思考を深める時間が増す。また、電子黒板に備わった「ペン機能」を使い、情報を書き足すことで、重要項目を明確にできる。書画カメラは、使用時にソフトを立ち上げる必要があるため少し手間はかかるが、映像は鮮明であり臨機応変に複数の素材を提示できて便利である。また、音声を英文と一緒に、または音声のみをスライドに貼り付けておくことで、音読練習やリスニングなどで活動のバリエーションが広がる。

イ 電子黒板での画面共有と画面保存

電子黒板の画面を共有しているため、双方が一つの画面に書き込むことができる。生徒の意見や解答、教員の添削内容を「サムネイル機能」でパソコンに画面ごと保存しておくことも可能で、解答方法や思考の過程を把握でき、評価にも活用できる。

ウ 1人1台タブレット端末を活用した授業構成

Zoom 会議システムを利用し、個別にパフォーマンステストを実施する。対面授業に近い環境で集中してテストを受けることが可能である。

(2) 遠隔授業に関する研修・研究

ア 教材開発及び授業向上のための研修・協議

(ア) 高知県教育センターにて、全国の ICT 環境が充実した学校でのオンライン教育に関する研修を受講

学んだ内容 Zoom 会議システム、ロイロノート、動画作成の手順、Google Workspace for Education の活用

(イ) 遠隔授業配信センターにて、各教員が録画した授業ビデオについて配信センター内で検討

学んだ内容 遠隔教育システムの活用と留意点

- ・発音練習時に ALT の口元をアップにし、よりはっきりと正しい口の動きを示す。
- ・複合機と書画カメラを併用して、生徒が記述したものを即座に提示する。
- ・前回の授業の要点を休み時間にパワーポイントを用いて、自動で流す。
- ・教員が画面から消えないような立ち位置を確認する。(カメラの「プリセット機能」の利用が

効果的)

- ・パワーポイントのスライド構成方法を工夫する。(見やすい文字のフォントや大きさ、興味がわくイラストの挿入方法、1枚のスライドでの適切な情報量)

イ 遠隔授業が進んでいる国内外での実践例から学ぶ

ICT を活用した授業に関する国内外の実践レポートによると、遠隔授業では対面授業よりも入念な準備が必要とされており、特に以下の点に留意した。

- ・必要に応じて対面授業と連動させ、到達目標と学習活動、そして評価を一致させる。
- ・グループやペアでのライティングやプレゼンテーションなど協働型のタスクを課す。
- ・著作権に留意する。(改正著作権法第35条運用指針等)

(3) 受信校との協働的な授業づくり及び授業アンケートの実施

ア 遠隔支援教員との連絡・相談

授業前後に遠隔支援教員との打ち合わせ時間を確保する。授業内容や音声の確認、生徒の理解度、授業のペース、評価規準等に関して確認する。遠隔支援教員の授業記録や生徒状況の「見取り」についても評価の一部とする。また、生徒理解のため希望進路や部活動などの情報に関しても連絡を密にする。

イ 授業アンケートの活用

生徒及び遠隔支援教員を対象に遠隔授業に関する調査アンケートを本年度4回(4月、7月、12月、2月)実施した。その結果を踏まえ、実践の状況を配信センターで確認し合い、ネットワークや授業の問題点・改善点などを協議し、授業にフィードバックするよう努めた。

3 実践の成果

電子黒板を活用することで、時間の短縮や効果的に音声や重要ポイントを示すことが可能になると分かった。また、提示した教材に色と太さを調節できる「ペン」で必要に応じて書き込みをしたり、一定時間で消える「指示ペン」を用いることで、生徒の注意を引きつけたりして、「現在の学習地点」を明確にすることができた。生徒からは、「パワーポイントを活用した授業では、『授業内でのつまずき』に応じて、以前の学習内容のスライドがすぐに示されるので、既習事項を確認することができ、黒板のみの授業よりも効果的だった。」という意見が見られた。また、研修会に複数回参加し、学んだ内容である Zoom を利用したパフォーマンステストなどを積極的に授業に取り入れた。受信校との協力体制に関しては、授業前後及び必要に応じて連絡を密にし、時にチームティーチングを行うことで、教育効果を上げることができた。

4 課題及び今後の取組

遠隔授業に係る教材の作成から成績処理まで一連の実践を通して、成果とともに課題もいくつか確認された。音声を受信校に伝わるまでのタイムラグ、細かい語尾の子音が聞き取りづらいなどの英語特有の課題にも対処しなければいけない。また、1人1台タブレット端末による Google アプリの活用についても研究する必要がある。

次年度は、効果的な教材のさらなる研究・開発と数値データによる学力向上の検証を研究として進める。

複数校への同時配信による補習の様子

